

書評

王柳蘭 著

『越境を生きる雲南系ムスリム』

——北タイにおける共生とネットワーク——

(昭和堂、二〇一二年)

土佐桂子 (東京外国語大学大学院)

本書は、雲南からタイに移住した雲南系ムスリムに着目し、長いタイムスパンのなかで雲南系漢人を含めた移住を再構成し、彼らが他者と共生を図る姿を描く力作である。本書については、タイ、ミャンマーの回族研究にくわしく、最もふさわしい評者である吉松久美子氏の書評が『東南アジア——歴史と文化』第四〇号(二〇一二年)に掲載予定である。タイ、移民、ムスリム研究のいずれにも明るくない評者では力不足のそしりを免れないが、可能な範囲で評すことにしたい。

まず本書の要約を行う。第一章で研究の目的に続いて、本書で扱う雲南系ムスリムに関わる用語の定義を示し、先行研究における方法論的位置づけを示す。エスニシティ研究は国民国家内部の民族動態に議論が収斂しがちであり、

また、近年増加しつつあるトランスナショナリズム、ディアスポラ研究においては共時的ネットワーク論に重点が置かれ、集団の生成への着目が少なく、歴史的視点を含め越境を扱う必要がある。タイ華人研究内では、海路華人に対して陸路華人を、南タイ中心のムスリム⇨移民研究に対して北タイの雲南系ムスリムを扱う点で稀少である。第二章では、タイにおける雲南系華人集落の分布を示し、雲南からの移住を三期に区分する。第一波は一九世紀後半から二〇世紀前半の雲南系ムスリムの交易を中心とした移動、第二波は一九四〇年代半ばから五〇年前後にかけて、中華共産党政権成立による不安や国民党軍の敗走に従って形成された難民村のはじまり、第三波は一九六〇年代以降国民党軍の定着以後の動きで、ビルマ系反政府軍のタイ越境や反共ゲリラ政策に基づいた戦略村の形成なども含まれる。これらを背景として、続く第二章で個々の移動の歴史を示す。第三章では雲南系漢人の越境経験とネットワークの形成を示し、第四章では雲南系ムスリムを主にして、チェンマイ市やメーサリアン市に集住する事例を紹介している。第五章ではタイ国家による雲南人の法的位置づけを示す。多様な文化的宗教的要素を捨象し、移住時期と経緯により「元国民党軍系兵士」「国民党軍系ホー避難民」「非国民党軍系ホー」に分類し、反共産主義にとつての国益という観点から、上記の順に優先的にタイ国籍を与えていった。第六章

では雲南系漢人と雲南系ムスリムがエスニシティに基づき分化するプロセスを示し、とくに後者がイスラーム・ネットワークをいかに使うかに焦点を当てる。中東諸国からの援助も得てモスクや学校建設を行い、結果的に宗教儀礼の共同化が生じ、それがマッカ巡礼や故郷訪問の下地を作っている。第七章では、華人社会とのネットワーク形成を示している。「避難村」の住人などを中心に、台湾とのつながりが軍事支援から人道支援に移りつつも強化される一方で、非漢人を中心に中国側の働きかけもあつて、再ネットワーク化が図られる。終章で結論が述べられている。

本書の意義は数多くあるが、とくに評者は以下の三点に注目した。第一に、王氏はあくまで研究対象から手法と理論を模索し、結果的に手法の独自性を獲得している点である。人類学において、フィールド調査の捉えなおしが近年試みられているとはいえ、マリノフスキー以来、一か所に長期滞在して行う共同体調査を最も得意としてきた。それに対して、本書の対象は越境を特徴とする人々である。人類学的アプローチからいえば、後半の集住地域を核に、住民の語りから移住史を再構成し、集住状況を描くという選択肢もあつただろう。しかし、王氏は雲南系移民をその出発点からとらえようとし、その結果、歴史的ダイナミズムを踏まえた移動の再構成に成功した。本来序論に書きそくな人間味あふれた研究対象との出会いが敢えて第二章で書

かれていることも興味深い。タイ人、雲南人、さらに雲南漢人のあいだで、可視化しにくい存在であるからこそ、雲南系ムスリムの現時点の集住分布を数量的に示す。これは、民族植物学研究から始まった息の長い調査と「文理融合」的素地抜きには成し遂げられない、優れて貴重な成果である。

第二に、点から線へ、線が交錯して面をなすにいたる移住の記述の丹念さである。政治経済的な状況による影響や個人的ないし家族内の事情、さらにはアヘン交易をはじめとする敢えて「語られない」裏の状況にも十分目配りしつつ、越境の経験が丹念に描かれていく。ここから移住の背景にある政治経済的状況が読み込まれると同時に、過去の一時点での複数の選択肢、ないし個人目線による地域、空間認識までも浮かび上がり、前者の数量的・空間的明示と対をなし、「移動」経験をまさに生きたものとして提示しえた。

第三に、著者は「雲南系ムスリム」を主な調査対象としつつ、「くくり」を語る難しさに自覚的である。例えば国民党政権徴用の馬幫資料（八四―八六頁）に典型だが、当事者の「出身」はともかく「宗教」が見えにくい。さらには、雲南人、ムスリム、漢人、国民党軍、ホーなど、「くくり」やその意味が状況により変化するばかりか、くくられる内実すら異なるなかで、「雲南系ムスリム」を追うこ

とも覚悟が必要だったに違いない。彼らは交易を通じて、あるいは移動を余儀なくされる厳しい状況下で、名付けと名乗りの絶え間ない相互プロセスを生き抜いた人々であり、エスニシティの観点からすれば、まさに「フレキシブル」である。しかし、読者も気を引き締めて追わねば振り落とされるほど複雑で入り組んだ記述の読後には、アイワ・オンのような、後期資本主義社会を背景に複数のアイデンティティを使い分けるといふ華人研究が逆に単調に感じられる (Ong 1999)。もちろんオンの書籍は現代における共時現象を主に扱い、スタンスも異なる。ナショナルな範囲を超えたアイデンティティの共有については、映画、ドラマといったメディアによる公共圏という概念を援用するが、対照的に王氏はトランスナショナルなネットワーク化についても徹底して実証主義を貫き、アイデンティティ論はかなり注意して扱っている。

評者はこの禁欲さと実証主義に心から敬意を表するものである。とはいえ、本書の成果を前提として、今後、エスニシティ論におけるすり合わせは多少あってもよいと感じる。例えば、交易者としての移動やそのためのネットワーク作りといった職業的ハビタスが重要だったことも伝わる。雲南系漢人の田氏のように、商売上の店主「老板」のもとで交易に携わる「赶馬人」の仕事をしつつ、ムスリムの店主の人格に惚れてイスラームに改宗したという例も興

味深い (一五二―一五三頁)。こうしたハビタスが宗教実践と結びついていた可能性もあるだろう。一方、「定住」をはじめ、モスクを建てるチェンマイの事例では「雲南系ムスリム」が意識されたエスニシティとして確立しつつある。それでは彼らにとつて「移動」や「交易」、ネットワーク化といった特徴的営為はなんであったのか、あるいはそれらは定着後にいかに伝えられるのか等、今後さらなる議論が期待できるだろう。

一方、移動の際に個々人の周りにあるのは、従来前提とされた「共同体」というよりネットワークであり、資料の制約から考えても個の語りを基に描く手法は適切だと思う。しかし、集住地域では一定の共同性を有する「コミュニティ」が存在している。たとえば、バーン・ホー・モスクの集住例でも同一民族・同一宗教間で結婚相手を探すことが好まれ (二二八―二三七頁)、定住後の社会形成の一端がうかがえ、興味深い。ただし、この記述を含め、集住地域でもインフォーマントの語りと王氏のまとめというスタイルが中心となる点は若干気になる。コミュニティ内での人間関係、相反する見解、ないし、王氏の解釈にいたるプロセスが見える情報があと一息加えられてもよかつたかとは思ふ。しかし、これらは本書に導かれさらなる興味として出る、いわば読者の期待である。ひとつのデシプリン内でもどうしてもアプローチしにくい研究対象というもの

は存在する。王氏がそこに正面から取り組み、見事に学際的な成果を上げたことは間違いない。

●引用文献

Ono, Akiwa. (1999) *Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality*, Durham & London, Duke University Press.